

常葉大学教育学部新入生における自己意識の変化(2)

吉田 哲也, 伊東 明子

Changes in Self-Awareness Among First-Year Students in
Tokoha University's Faculty of Education (2).

Tetsuya YOSHIDA, Akiko ITO

2015年11月20日受理

抄 録

本研究は常葉大学教育学部1年生を対象に、大学適応に関わる指標として仮想的有能感(他者軽視)傾向と自己肯定感という2つの自己意識を取り上げ、4月当初の入学意思や課外活動への参加状況、他者とのコミュニケーション頻度が自己意識にどのように影響を及ぼすかを1年間の縦断的調査から探索的に検討することを目的とした。研究の結果、仮想的有能感には4月当初の入学意思が、自己肯定感には他者とのコミュニケーション頻度が直接的に影響を与える可能性が示唆されたが、継時的分析より各変数の関係性には変化が示唆された。特に他者とのコミュニケーション頻度と2つの自己意識との関連性は、課外活動への活動状況が間接的に影響しつつ調査実施時点ごとに少しずつ変化する可能性が示唆された。

キーワード：大学適応, 仮想的有能感, 自己肯定感, 学生支援, 縦断的研究

【問題と目的】

文部科学省(2014)による平成24年度の大学中退者・休学者状況の調査によると、学校生活不適應を理由とする私立大学学部生の中退者率は5.1%、休学者率は3.9%であり、国公私立高専総計における割合(中退者率4.8%、休学者率3.6%)や国立大における割合(中退者率1.9%、休学者率2.7%)、公立大における割合(中退者率3.8%、休学者率2.7%)と比較すると割合が大きく、特に私立大学において一人でも多くの学生が大学生活に適應するよう支援することが必要であると考えられる。

これまでも大学生の適應の問題を検討した研究はいくつかあるが、その中でも山田(2006)や高下(2011)は、初年次学生における適應支援の重要性を指摘し検討を行っている。しかしいずれの研究もいわゆる前期授業期間にあたる初年次初期の期間に限定されており(山田の研究では6月に、高下の研究では4月・7月に実施)、初

年次学生の年間を通じた適応に関する継時的検討は行われていない。脇本（2013）も主張するように、大学適応に関して継時的な検討を行い、そこから得られた知見に基づいて例えばスクリーニング等の手段によって不適応傾向があらわれ始めた学生に早い段階から支援を行うことができれば、従来よりも適切な学生支援となる可能性が考えられる。したがって、本研究の大きな目的は、大学適応に関わる要因について継時的検討を試みることにある。

以上の問題意識に基づき、大学適応に関わる指標として2つの自己意識に焦点をあて、自己意識と関連すると思われる諸要因を探索的に検討することで大学新入生の大学生活への適応のプロセスを探ることを目指して、2014年4月から2015年1月にかけて継時的に調査を行い、そのうち前期授業期間の調査結果を吉田・伊東（2015）にまとめた。本報告は本研究の第二報告であり、後期授業期間を含めた一年間を通じた自己意識の変化とそれに関わる諸要因の検討を報告するものである。

吉田・伊東（2015）でも述べたように、本研究では自己意識として「自己の直接的なポジティブ体験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水，2011）」と定義される仮想的有能感と、「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情（田中，2005）」と定義される自己肯定感という二つの概念を取り上げ、入学当初の入学意思、サークル活動やアルバイト・ボランティア活動といった課外活動の状況、他者とのコミュニケーションの頻度との関連性を検討する。仮想的有能感と自己肯定感を検討する理由については吉田・伊東（2015）に述べたとおりであるが、ここでは入学意思や課外活動、他者とのコミュニケーション頻度との関連を検討する理由について述べたい。

進学動機や課外活動、人間関係と大学（学校）適応との関係を検討した研究はいくつかみられる。中村・松田（2013）は、大学への入学目的の明確さが大学への不適応状態と負の相関があることを示している。また永作・新井（2005）は高校生を対象とした研究ではあるものの、高校への自律的な進学動機の高さと学校適応感に関連があることを示している。これらから、もし仮想的有能感や自己肯定感が大学生の適応の指標となりうるならば、進学動機や入学意思とこれら2つの自己意識にも何らかの関連性がみられることが予想される。

また中村・松田（2013）は、友人との関係の良好さも大学への不適応状態と負の相関があることを示し、入学目的の明確さと併せて大学生の学校適応を検討するうえで重要な要素であることを指摘している。大久保（2004）も、大学における他者との良い関係性の希求が適応と関連がある可能性を示唆している。このことから、少なくとも学校内における他者との関係性が大学生の学校適応に関係していることが考えられる。他者との関係性の濃さを示す量的な指標として、課外活動の頻度やコミュニケーションの頻度が考えられる。もしこれらの指標が仮想的有能感や自己肯定感と関連するならば、大学生の学校適応について何らかの示唆が得られる可能性が考えられる。ただ、従来の研究が示しているのは学校内の人間関係が適応と関連している、ということであり、例えば学校外の他者との関係性や学校外の課外活動がどのように学校適

応に影響を与えるかは不明な点が多い。例えば谷島(2005)は、調査を実施した大学の一部ではあるもののアルバイトをしていることと大学に対する満足度に負の相関がみられたことを示しており、課外活動が充実していることが必ずしも大学生の適応に良い影響を与えるとは限らない可能性が考えられる。

以上より本研究では、入学当初の入学意思、サークル活動やアルバイト・ボランティア活動といった他者とのかかわりの違い、あるいは他者とのコミュニケーションの頻度の違いが仮想的有能感や自己肯定感に影響を与えるかを、初年次学生を対象に計4回にわたる継時的調査によって探索的に検討することを目的とする。

【方法】

調査協力者 常葉大学教育学部初等教育課程・生涯学習学科・心理教育学科に在籍している1年生であり、2014年度前期教職必修科目教育心理学または選択科目心理学を受講している学生に依頼した。さらに後期にこれら学生の追跡調査を行うため、2014年度後期教職必修科目教育原理、選択科目社会教育計画概論および心理学概論を受講している学生に依頼した。調査実施時に口頭と文書で説明合意を得ており、協力に合意したもののうち、第1回調査から第4回調査までの全てで調査に協力した学生を除く学生を分析から除外した。さらに欠損データのあるもの、回答内容に明らかな疑いが認められ筆者2名の合議により除外が合意されたものを除く150名(男性63名、女性87名)を最終的な分析対象とした。平均年齢は第1回調査時点で18.13歳(SD: 0.50)、第2回調査時点で18.38歳(SD: 0.64)、第3回調査時点で18.61歳(SD: 0.69)、第4回調査時点で18.89歳(SD: 0.59)だった。表1に学科・性別ごとの分析対象者数を示す。

調査時期 第1回調査は2014年4月に、第2回調査は2014年7月に、第3回調査は2014年10月に、第4回調査は2015年1月に実施した。

調査方法 質問紙は個別自記入形式であり、上記授業時間内に筆者によって集合調査形式で実施した。実施時間は説明を含め15分～20分程度だった。

質問紙の構成

第1回調査

フェイスシート(年齢・性別・学籍番号)のほか、以下の項目で構成した。

- (1)入学意思：本学に入学したかった気持ちの強さを1(入学したくなかった)～10(入学したかった)の10段階で回答を求めた。
- (2)サークル・アルバイト・ボランティア活動の有無：サークルについては入部したまたは入部することを決めているか、そうでないかを、アルバイトおよびボランティア活動については、しているまたはする予定があるか、そうでないかを、それぞれ2件法で回答を求めた。
- (3)他者とのコミュニケーション頻度：「家族(親兄弟誰か一人でも可)」、「学校や塾の先生(以下、先生)」、「現在の同級生(以下、同級生)」、「友人」、「先輩」、「自

分の居住する地域の人（以下、地域）」「アルバイトやボランティア先の年上の人（以下、年上）」を対象とし、各々との間でのコミュニケーション頻度（直接的なコミュニケーションのほか、電話、メールやSNS等のインターネットを介したコミュニケーションも含めた）を求めた。回答は1（まったくしない）～5（よくする）までの5件法で求めたが、「年上」については、アルバイト・ボランティアをおこなっていない調査協力者がいる可能性を考慮し、0（やっていない）、1（まったくしない）～5（よくする）までの6件法で回答を求めた。

- (4)仮想的有能感（他者軽視）尺度：速水（2006）の仮想的有能感尺度第二版11項目に対し、1（まったく思わない）～5（よく思う）までの5件法で回答を求めた。尺度項目を表2に示す。
- (5)自己肯定感尺度：田中（2005）の自己肯定尺度 ver.2 8項目に対し、1（まったくあてはまらない）～4（よくあてはまる）までの4件法で回答を求めた。尺度項目を表3に示す。なお、尺度項目のうち項目番号2、5、6、7は逆転項目のため、分析にあたっては逆転項目の処理を行った後得点化を行った。

第2回調査～第4回調査

フェイスシート（年齢・性別・学籍番号）のほか、以下の項目で構成した。

- (1)サークル・アルバイト・ボランティア活動の頻度：各々その個数（活動団体数またはアルバイト先数）と、一か月あたりの平均活動時間（複数の団体あるいはアルバイト先がある場合、各々の平均活動時間を合計したもの）について回答を求めた。
- (2)他者とのコミュニケーション頻度、(3)仮想的有能感（他者軽視）尺度、(4)自己肯定感尺度は第1回調査と同じ尺度を用いた。

表1 学科・性別ごとの分析対象者数

学科	男性	女性	計
初等教育課程	33	28	61
生涯学習学科	20	19	39
心理教育学科	10	40	50

表2 仮想的有能感（他者軽視）尺度の尺度項目

1	自分の周りには気のきかない人が多い。
2	他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる。
3	話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い。
4	知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い。
5	他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる。
6	自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は私の周りに少ない。
7	他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い。
8	私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる。
9	今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない。
10	世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない。
11	世の中には、常識のない人が多すぎる。

表 3 自己肯定感尺度の尺度項目

1	私は、自分のことを大切に感じる。
2	私は、時々、死んでしまった方がましだと感じる。
3	私は、いくつかの長所を持っている。
4	私は、人並み程度には物事ができる。
5	私は、後悔ばかりをしている。
6	私は、何をやってもうまくできない。
7	私は、自分のことが好きになれない。
8	私は、物事を前向きに考える方だ。

項目 2, 5, 6, 7 は逆転項目である

【結果と考察】

1. 仮想的有能感（他者軽視）尺度および自己肯定感尺度の内的妥当性の検討

仮想的有能感（他者軽視）尺度・自己肯定感尺度とも各々の作成者を中心として研究が数多く存在し尺度自体の有効性は確認されており、また吉田・伊東（2015）においても内的妥当性の検討を行っているが、念のため各4回の調査全てにおいて内的妥当性の検討を行った。

まず、仮想的有能感（他者軽視）尺度について、第1回～第4回調査それぞれで確認的因子分析を行った。先行研究に従い1因子構造を仮定し分析したところ、第1回調査ではGFI=0.92, AGFI=0.88, RMSEA=0.07、第2回調査ではGFI=0.91, AGFI=0.87, RMSEA=0.07、第3回調査ではGFI=0.88, AGFI=0.82, RMSEA=0.11、第4回調査ではGFI=0.88, AGFI=0.82, RMSEA=0.10であった。また α 係数を算出したところ、第1回調査では0.86、第2回調査では0.88、第3回調査では0.90、第4回調査では0.89であった。以上の結果から、仮想的有能感（他者軽視）尺度については第2回調査以降の適合度指標の値がやや低いものの、概ね先行研究の通り1因子構造が妥当であると判断し、以降の分析を行った。

次に、自己肯定感尺度について、第1回調査・第2回調査それぞれで確認的因子分析を行った。先行研究に従い1因子構造を仮定し分析したところ、第1回調査ではGFI=0.92, AGFI=0.86, RMSEA=0.10、第2回調査ではGFI=0.88, AGFI=0.79, RMSEA=0.14、第3回調査ではGFI=0.90, AGFI=0.82, RMSEA=0.12、第4回調査ではGFI=0.90, AGFI=0.82, RMSEA=0.13であった。また α 係数を算出したところ、第1回調査では0.84、第2回調査では0.83、第3回調査では0.84、第4回調査では0.86であった。以上の結果から、適合度指標の値がやや低いものの、今回は先行研究の通りそれぞれ1因子構造とし、各尺度の合計得点を尺度得点として算出し以降の分析を行った。

2. 仮想的有能感（他者軽視）および自己肯定感の経時比較

計4回の調査における分析対象者全員の仮想的有能感および自己肯定感の平均とSDを表4に示す。各尺度について調査時期を要因とした1要因の分散分析をおこなった。その結果、仮想的有能感においては1%水準で有意な主効果がみられ($F_{[3,447]}=5.12$,

$p<0.01$)、Holm 法による多重比較の結果、7月、10月、1月の得点が4月よりも高くなっていることが示された ($MSe=14.36, p<0.05$)。自己肯定感については1年間の得点に有意な変化はみられなかった。

次に、男女別に同様の分析を行った。表4に計4回の調査における仮想的有能感および自己肯定感の平均とSDを男女別に示す。各尺度について、それぞれ性別と調査時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった。その結果、性の主効果が有意であったのは仮想的有能感 ($F_{[1,148]}=7.38, p<0.01$) のみであり、女子よりも男子の方が高い得点を示した。

最後に、学科(初等教育課程：以下、初等；生涯学習学科：以下、生涯；心理教育学科：以下、心理)別に同様の分析を行った。表5に計4回の調査における仮想的有能感および自己肯定感の平均とSDを学科別に示す。各尺度について、学科と調査時期を要因とした2要因の分散分析をそれぞれおこなった。その結果、学科の有意な主効果がみられたのは仮想的有能感のみであり ($F_{[2,147]}=3.93, p<0.05$)、Holm 法による多重比較の結果、生涯が最も仮想的有能感が高く、初等と心理の間には差はみられなかった ($MSe=182.36, p<0.05$)。

以上の結果を概観すると、第一に仮想的有能感は大学入学直後の4月に比べると、7月、10月、1月が高いこと、第二に自己肯定感は年間を通して顕著な変化は見られないことが示唆された。特に、仮想的有能感は吉田・伊東(2015)で入学して3ヶ月後の7月で上昇したことが示されたが、今回の結果からはその後の10月・1月でも有意な変化は認められず、7月に上昇した水準を継続していることが分かる。このことについては、次節コミュニケーション頻度の経時比較の項で併せて考察する。

表4 調査の各時期における仮想的有能感(他者軽視)および自己肯定感の変化

		4月	7月	10月	1月	有意性
仮想的有能感	全員	26.17 (6.97)	27.69 (7.82)	27.47 (7.98)	27.50 (7.56)	** 4月<7月=10月=1月
	男子	27.86 (7.31)	29.43 (8.32)	29.46 (8.71)	29.10 (8.10)	** 男子>女子
	女子	24.94 (6.39)	26.43 (7.19)	26.03 (7.06)	26.34 (6.92)	
自己肯定感	全員	21.69 (4.15)	21.53 (4.11)	21.35 (4.06)	21.64 (4.22)	n.s
	男子	21.89 (4.55)	21.79 (4.22)	21.41 (4.41)	21.76 (4.69)	n.s
	女子	21.55 (3.82)	21.33 (3.85)	21.30 (3.79)	21.55 (3.84)	

カッコ内はSDを示す ** $p<0.01$

表5 学科ごとの各時期における仮想的有能感および自己肯定感の変化

		4月	7月	10月	1月	有意性
仮想的有能感	初等	25.11 (5.71)	26.28 (6.98)	26.44 (8.06)	26.46 (7.56)	* 生>心=初
	生涯	28.87 (8.11)	29.90 (8.28)	30.03 (7.67)	29.87 (8.28)	
	心理	25.34 (6.77)	27.68 (8.03)	26.74 (7.67)	26.92 (6.51)	
自己肯定感	初等	22.07 (3.84)	22.05 (3.87)	21.72 (3.74)	22.11 (3.98)	n.s
	生涯	21.79 (3.82)	21.46 (3.77)	20.97 (4.05)	21.28 (4.51)	
	心理	21.16 (4.66)	20.94 (4.53)	21.18 (4.39)	21.34 (4.22)	

カッコ内はSDを示す ** $p<0.01$

3. コミュニケーション頻度の経時比較

各コミュニケーション対象者（家族・先生・同級生・友人・先輩・地域の人・年上の人）に対するコミュニケーション頻度の経時比較を行った。まず、計4回の調査における分析対象者全員のコミュニケーション頻度の比較を行った。結果を表6に示す。コミュニケーションの各対象について、それぞれ時期を要因とした1要因の分散分析およびHolm法による多重比較をおこなった結果、「家族」($F_{[3,447]}=6.04, p<0.01, 4月>10月=1月$ ($MSe=0.40, p<0.05$))、「先生」($F_{[3,447]}=7.98, p<0.01, 4月>7月=1月, 10月>1月$ ($MSe=0.88, p<0.05$))、「友人」($F_{[3,447]}=2.72, p<0.05, 4月>1月$ ($MSe=0.22, p<0.05$))、「地域」($F_{[3,447]}=12.16, p<0.01, 4月>7月=10月>1月$ ($MSe=0.80, p<0.05$))の4対象において、4月よりもそれ以降の時期でコミュニケーション頻度が減少した。反対に「先輩」($F_{[3,447]}=3.17, p<0.05, 4月<10月$ ($MSe=0.71, p<0.05$))、「年上」($F_{[3,447]}=20.49, p<0.01, 4月<7月=1月=10月, 7月<1月$ ($MSe=2.04, p<0.05$))については4月よりもそれ以降の時期でコミュニケーション頻度が増加した。さらに「年上」における回答で「アルバイト・ボランティアをおこなっていない」とした者を「非体験者」とし、その人数を χ^2 検定を用いて検討した。その結果、有意な偏りがみられ($\chi^2_{[3]}=30.29, p<0.01$)、ライアンの名義尺度を用いた多重比較をおこなった結果、4月の非体験者人数が最も多く、他の3時期では有意に少なくなっていることが示された($p<0.05$)。「7対象の頻度合計」「同級生」では、いずれも有意な時期の主効果はみられなかった。

次に男女別の検討を行った。結果を表6に示す。コミュニケーションの各対象および7対象を合計したコミュニケーション頻度について、それぞれ性別と時期を要因とした2要因の分散分析をおこなった。その結果、性の主効果がみられたものは「家族」($F_{[1,148]}=11.40, p<0.01$)のみであり、男子よりも女子の頻度が高かった。アルバイト・ボランティアの「非体験者」についても χ^2 検定を用いて検討したが、有意な人数の偏りはみられなかった。

最後に学科別の検討を行った。結果を表7に示す。コミュニケーションの各対象および7対象を合計したコミュニケーション頻度について、学科と時期を要因とした2要因の分散分析をそれぞれおこなった。ここでは学科の主効果および学科と時期の交互作用が有意だったものを示す。

その結果、「家族」では学科の主効果が有意な傾向にあり($F_{[2,147]}=3.02, p<0.10$)、多重比較の結果、心理が最も頻度が高く、次いで初等、最も家族とのコミュニケーションが少なかったのは生涯だった($MSe=2.05, p<0.05$)。

「先生」については交互作用が有意であり($F_{[6,441]}=2.62, p<0.05$)、単純主効果の検定をおこなった結果、10月における学科間に有意な差がみられ($p<0.01$)、多重比較の結果、初等が生涯よりも高かった($MSe=1.55, p<0.05$)。学科ごとでは初等($p<0.01$)と生涯($p<0.05$)に有意な変化がみられ、初等は4・7・10月に比べて1月のコミュニケーション頻度が低くなっており、生涯は4月に比べて10月のコミュニケーション

ン頻度が低くなっていることが示された（いずれも $MSe=.86, p<0.05$ ）。

「先輩」については学科の主効果が有意であり ($F_{[2,147]}=3.42, p<0.05$)、多重比較の結果、初等と生涯の得点が心理よりも高かった ($MSe=4.70, p<0.05$)。

「年上」については交互作用が有意であり ($F_{[6,441]}=2.63, p<0.05$)、単純主効果の検定をおこなった結果、1月における学科間に有意な差がみられ ($p<0.05$)、多重比較の結果、生涯が心理よりも高かった ($MSe=2.94, p<0.05$)。学科ごとでは初等 ($p<0.01$) と生涯 ($p<0.01$) に有意な変化がみられ、初等は4月に比べて7・10・1月のコミュニケーション頻度が高くなっており、生涯は4・7・10月に比べて1月のコミュニケーション頻度が高くなっていることが示された（いずれも $MSe=1.99, p<0.05$ ）。

「コミュニケーション合計」については交互作用が有意であり ($F_{[6,441]}=3.27, p<0.01$)、単純主効果の検定をおこなった結果、10月における学科間に有意な差がみられ ($p<0.05$)、多重比較の結果、初等が生涯・心理よりも高かった ($MSe=22.64, p<0.05$)。学科では初等 ($p<0.01$) に有意な変化がみられ、4月に比べて10月、1月に比べて7・10月のコミュニケーション頻度が高いことが示された（いずれも $MSe=9.97, p<0.05$ ）。

「同級生」「友人」「地域」では学科に有意な差はみられず、アルバイト・ボランティアの「非体験者」についても、人数の有意な偏りはみられなかった。

以上の結果を概観すると、第一に「家族」「先生」「友人」「地域」とのコミュニケーション頻度は4月に比べてそれ以降の時期では減少すること、第二に、逆に「先輩」「年上」とのコミュニケーション頻度は4月に比べてそれ以降の時期で増加すること、が示唆された。

これらの結果を前節の仮想的有能感・自己肯定感の経時比較と併せて考察したい。今回の結果は、吉田・伊東（2015）でも指摘したとおり、コミュニケーション対象の変化との関連が推察される。「家族」「先生」など「無条件で自分を保護してくれる相手」とのコミュニケーションが減少し、「先輩」「年上」のような「少し背伸びをすれば対等に扱ってくれる相手」とのコミュニケーションが増加した。これは学生に行動範囲の広がりや新しい行動様式の獲得を与え、これまでに知らなかった社会を体験させることになる。その中ではポジティブな経験ばかりではなく、ときにはネガティブな感情を引き起こす場面やコミュニケーションも存在するはずである。そういった状況に適応していくためには、背伸びをし、ときには虚勢をはりながら現実と向かい合っていかななくてはならず、その際生じる他者への感情の1つの表現形態が仮想的有能感であるとも考えられる。今回の調査で仮想的有能感がいたずらに上昇するのではなく、7月以降はその水準を保っていたこと、自己肯定感は年間を通じて有意な変化を示さなかったことなどと合わせて考えていくと、入学直後の仮想的有能感の上昇は適応のために必要な1つのプロセスであるとの見方も可能になる。ただしこれは1年間のデータをもとにした部分的な推測にすぎないため、2年生以上の学生に対して継時的な測定をおこなっていくことが求められる。

また今回の研究で新たに明らかになったのは「友人」とのコミュニケーション頻度

の減少である。入学当初は人間関係の構築に多くのエネルギーを注入するが、年度を通して漸減していることが分かる。その減少が人間関係の安定によるものか、何らかの理由により関係からの退却を余儀なくされたものかはさらに検討が必要であると考ええるが、学生支援を考える上では留意すべき点である。とかく入学直後の人間関係には注目し、支援に力を入れることは多いが、むしろ人間関係に慣れ、関係が変化する夏休み前あるいは後期開始後の時期での目配りと介入が必要となる。この点については友人関係の質の変化も合わせてさらに検討していく必要があるだろう。

6 調査の各時期におけるコミュニケーション頻度得点の変化

対象		4月	7月	10月	1月	有意性
全7対象合計	全員	24.41 (4.78)	24.67 (4.67)	24.96 (4.87)	24.17 (4.49)	<i>n.s</i>
	男子	24.78 (4.79)	24.83 (4.75)	24.81 (4.49)	23.83 (4.33)	<i>n.s</i>
	女子	24.14 (4.76)	24.55 (4.60)	25.01 (5.13)	24.43 (4.59)	
家族	全員	4.56 (0.77)	4.40 (0.91)	4.36 (0.95)	4.25 (0.98)	**4月>10月=1月
	男子	4.37 (0.86)	4.21 (1.01)	4.19 (1.02)	3.90 (1.08)	**男子<女子
	女子	4.70 (0.66)	4.54 (0.80)	4.48 (0.87)	4.51 (0.81)	
先生	全員	2.80 (1.17)	2.52 (1.18)	2.57 (1.28)	2.27 (1.14)	**4月>7月=1月、10月<1月
	男子	3.00 (1.22)	2.52 (1.14)	2.60 (1.24)	2.22 (0.98)	<i>n.s</i>
	女子	2.66 (1.10)	2.52 (1.20)	2.55 (1.31)	2.31 (1.23)	
同級生	全員	4.63 (0.74)	4.73 (0.68)	4.62 (0.77)	4.63 (0.67)	<i>n.s</i>
	男子	4.70 (0.55)	4.79 (0.51)	4.56 (0.79)	4.60 (0.61)	<i>n.s</i>
	女子	4.59 (0.85)	4.69 (0.78)	4.67 (0.75)	4.64 (0.71)	
友人	全員	4.75 (0.54)	4.70 (0.61)	4.68 (0.63)	4.60 (0.62)	4月>1月
	男子	4.83 (0.38)	4.68 (0.64)	4.70 (0.55)	4.54 (0.59)	<i>n.s</i>
	女子	4.70 (0.63)	4.71 (0.59)	4.67 (0.67)	4.64 (0.64)	
先輩	全員	3.12 (1.32)	3.31 (1.32)	3.41 (1.39)	3.34 (1.25)	*4月<10月
	男子	3.16 (1.39)	3.38 (1.36)	3.38 (1.35)	3.30 (1.20)	<i>n.s</i>
	女子	3.09 (1.27)	3.25 (1.28)	3.43 (1.41)	3.37 (1.28)	
地域	全員	2.71 (1.26)	2.45 (1.20)	2.41 (1.22)	2.09 (1.16)	**4月>7月=10月>1月
	男子	2.83 (1.29)	2.48 (1.23)	2.43 (1.19)	2.22 (1.21)	<i>n.s</i>
	女子	2.62 (1.22)	2.43 (1.17)	2.40 (1.25)	1.99 (1.11)	
年上	全員	1.83 (1.96)	2.56 (1.86)	2.91 (1.82)	2.99 (1.73)	**4月<7月=1月=10月、7月<1月
	男子	1.90 (1.99)	2.76 (1.93)	2.95 (1.86)	3.03 (1.75)	<i>n.s</i>
	女子	1.78 (1.94)	2.41 (1.79)	2.87 (1.79)	2.97 (1.72)	
アルバイト等 非体験者(人)	全員	72	38	32	26	**4月>7月=10月=1月
	男子	30	15	15	12	<i>n.s</i>
	女子	42	23	17	14	

カッコ内はSDを示す ** $p<.01$, * $p<.05$

表7 学科ごとの各調査時期におけるコミュニケーション頻度得点

対象		4月	7月	10月	1月	有意性
全7対象合計	初等	24.61 (4.45)	25.69 (4.14)	26.43 (3.89)	24.16 (4.19)	10月*初>生=心 初等**4月<10月. 7月=10月>1月
	生涯	24.59 (5.22)	24.33 (5.34)	23.56 (5.90)	24.95 (4.58)	
	心理	24.02 (4.79)	23.68 (4.46)	24.26 (4.58)	23.58 (4.69)	
家族	初等	4.51 (0.80)	4.51 (0.84)	4.44 (0.88)	4.16 (0.93)	†心>初>生
	生涯	4.38 (0.87)	4.23 (0.97)	4.05 (1.08)	4.08 (1.14)	
	心理	4.76 (0.59)	4.40 (0.92)	4.50 (0.85)	4.50 (0.85)	
先生	初等	3.00 (1.21)	2.69 (1.25)	2.97 (1.17)	2.20 (1.05)	10月**初>生 初等**4月=7月=10月>1月 生涯*4月>10月
	生涯	2.67 (1.16)	2.41 (1.10)	2.08 (1.35)	2.18 (1.08)	
	心理	2.66 (1.07)	2.40 (1.11)	2.48 (1.20)	2.44 (1.25)	
同級生	初等	4.64 (0.60)	4.90 (0.30)	4.67 (0.62)	4.64 (0.54)	n.s
	生涯	4.72 (0.68)	4.59 (0.87)	4.51 (0.90)	4.67 (0.61)	
	心理	4.56 (0.92)	4.64 (0.79)	4.64 (0.82)	4.58 (0.83)	
友人	初等	4.74 (0.44)	4.74 (0.44)	4.74 (0.44)	4.54 (0.59)	n.s
	生涯	4.79 (0.56)	4.69 (0.61)	4.51 (0.87)	4.64 (0.66)	
	心理	4.74 (0.63)	4.66 (0.76)	4.74 (0.56)	4.64 (0.62)	
先輩	初等	3.28 (1.15)	3.46 (1.21)	3.67 (1.14)	3.44 (1.14)	*初=生>心
	生涯	3.28 (1.40)	3.49 (1.32)	3.36 (1.49)	2.94 (1.33)	
	心理	2.80 (1.40)	2.98 (1.38)	3.12 (1.51)	2.94 (1.33)	
地域	初等	2.75 (1.24)	2.57 (1.26)	2.61 (1.15)	2.11 (1.10)	n.s
	生涯	2.79 (1.32)	2.54 (1.28)	2.41 (1.33)	2.23 (1.23)	
	心理	2.58 (1.22)	2.22 (1.01)	2.18 (1.18)	1.94 (1.16)	
年上	初等	1.69 (1.89)	2.82 (1.80)	3.33 (1.55)	3.07 (1.68)	1月*生>心 初等**4月<7月=10月=1月 生涯**4月=7月=10月<1月
	生涯	1.95 (1.96)	2.38 (1.92)	2.64 (1.91)	3.46 (1.52)	
	心理	1.92 (2.04)	2.38 (1.85)	2.60 (1.94)	2.54 (1.85)	
アルバイト等 非体験者(人)	初等	31	12	8	10	n.s
	生涯	17	12	10	3	
	心理	24	14	14	13	

カッコ内はSDを示す ** $p<.01$, * $p<.05$. † $p<.10$

4. コミュニケーション頻度の違う4群間の自己意識の比較

全4回の調査におけるコミュニケーション得点から、対象ごとに以下の4群を抽出した。なお高低を判断する基準値としては各指標の平均値を用いた。

「一貫高群」：全4回の調査においてその対象とのコミュニケーション得点が一貫して高かった群

「一貫低群」：全4回の調査においてその対象とのコミュニケーション得点が一貫して低かった群

「減少群」：4月は高頻度だったものの、第4回調査までに頻度が減少した群

「増加群」：4月は低頻度だったものの、第4回調査までに頻度が増加した群

「未体験群」：「年上」のみで抽出。全4回の調査でアルバイトやボランティアをせず、年上と全く関わりを持たなかった群

なお、対象によっては人数が少なかったため抽出できなかった群もある。また減少群・増加群において、頻度が上昇・低下に転じた時期は統一していない。抽出された群およびその人数を表8・9に示す。

以下に分析の結果を示すが、ここでは群の主効果および群と時期の交互作用が見られたものについて述べていく。

4-1. 仮想的有能感得点の比較

対象ごとに抽出されたコミュニケーション頻度群の仮想的有能感得点の平均とSDを表8に示す。群間に有意差あるいは傾向差がみられたのは「同級生」($F_{[2,113]}=5.59, p<0.01$)、「先輩」($F_{[3,115]}=2.19, p<0.10$)、「友人」($F_{[2,105]}=3.12, p<0.10$)の3対象であり、それぞれHolm法による多重比較をおこなった。

「同級生」の3群については減少群の仮想的有能感得点が最も高く、次いで一貫高群、最も仮想的有能感得点が低かったのは増加群だった($MSe=170.73, p<0.05$)。

「先輩」の4群についても減少群の仮想的有能感得点が最も高く、次いで一貫高群と増加群、最も仮想的有能感得点が低かったのは一貫低群だった($MSe=188.68, p<0.05$)。

「友人」の3群に関しては他の2対象と同様に減少群の仮想的有能感得点が一貫高群、増加群よりも高かった。

「コミュニケーション合計」「家族」「先生」「地域」「年上」においては時期の主効果は有意だったものの、有意な群間差はみられなかった。

4-2. 自己肯定感得点の比較

対象ごとに抽出されたコミュニケーション頻度群の仮想的有能感得点の平均とSDを表9に示す。群間または群と時期の交互作用が有意あるいは有意傾向だった対象は、「7対象合計」(交互作用: $F_{[9,348]}=1.72, p<0.10$)、「同級生」(交互作用: $F_{[6,339]}=5.90, p<0.01$)、「友人」(交互作用: $F_{[6,315]}=2.02, p<0.10$)、「地域」(群の主効果: $F_{[2,102]}=3.54, p<0.05$)、「年上」(群の主効果: $F_{[3,106]}=5.57, p<0.01$)の5対象であり、それぞれ下位検定をおこなった。

まず「7対象合計」について単純主効果の検定をおこなったところ、7月で有意差がみられ($p<0.05$)、一貫高群と減少群の自己肯定感が一貫低群よりも有意に高かった($MSe=17.54, p<0.05$)。10月では有意傾向($p<0.10$)、1月では有意差がみられ($p<0.05$)、いずれも一貫高群が一貫低群よりも有意に高かった(10月: $MSe=16.86, p<0.05$ 、1月: $MSe=18.77, p<0.05$)。群の主効果も有意であり($F_{[3,116]}=3.34, p<0.05$)、多重比較の結果、一貫高群が最も自己肯定感が高く、次いで減少群、次いで増加群、最も低かったのは一貫低群であった($MSe=60.94, p<0.05$)。

「同級生」についても単純主効果の検定をおこなったところ、減少群($p<0.01$)と増加群($p<0.01$)に有意差がみられた。多重比較の結果、減少群では4月の自己肯定感得点が10月・1月よりも高かった($MSe=2.80, p<0.05$)。増加群では10月の得点

が7月よりも高かった。

「友人」についても単純主効果の検定をおこなったところ、減少群にのみ有意な差がみられ ($p<0.05$)、多重比較の結果、4月の自己肯定感得点が10月・1月よりも高かった ($MSe=2.81, p<0.05$)。

「地域」については多重比較をおこなったところ、一貫高群と減少群の自己肯定感が一貫低群よりも高かった ($MSe=63.22, p<0.05$)。

「年上」についても多重比較をおこなったところ、一貫高群の自己肯定感が最も高く、次いで減少群と増加群、最も低かったのは未体験群だった ($MSe=54.99, p<0.05$)。

「家族」「先生」「先輩」については主効果および交互作用のいずれも有意ではなかった。

4-3. 考察

以上の結果を概観すると、第一に「友人」「同級生」など、同胞とのコミュニケーションの減少が他者軽視得点の増加と自己肯定感の低下と関連していること、第二に「地域」「年上」と一貫してコミュニケーションをとっている者の自己肯定感が高く、反対に一貫してとっていない者の肯定感は低いことが示唆された。これらの関係性について一部を後述する分析で検討するが、コミュニケーションの少なさが他者に対する軽視と自己に対する否定的な見方を生じ、これらの自他への意識変化がさらにコミュニケーションを抑制するという悪循環を生じさせている可能性は推察できる。

コミュニケーションは単なる情報のやりとりだけではなく、他者理解・自己理解の貴重な機会となり得る。他者の考えに触れることで自分にはなかった思考の枠組みや価値観を知ることができ、それが経験豊富な異年代のものであればなおさら学ぶものは多い。もちろん中にはネガティブな経験も生じるが、継続的なコミュニケーションはそれを成長の機会に変化させる可能性を秘めている。他者を知ることは必然的にその比較対象である自己も理解することにつながるし、コミュニケーションの中でおこなわれる他者からの評価を内在化させることは自己肯定感の上昇に貢献していると考えられる。

コミュニケーションと他者軽視、自己肯定感との関連がみられたことを踏まえた上で、大学はどのような学生支援をすべきだろうか。自己意識を短期間で変化させることは難しいため、むしろスキルであるコミュニケーションに焦点を当てるのが現実的である。例えば学内においては学生相談におけるソーシャルスキルトレーニング、スキル向上のための心理教育活動や授業内での協同学習の促進などが有効であろう。学外においては積極的に地域や関係機関と連携し、各種ボランティアなど学生が継続して活動の場を提供することが求められる。これまでの大学の傾向として、場の提供はするものの、その後の活動は学生任せになることも決して少なくない。大学が責任を持って学生の活動を見届け、適宜必要なフィードバックを継続させることが学生の成長に有効だと考えられる。

今後は、コミュニケーションの質的検討、他要因との関連、大学4年間における変遷などの観点からの検討が必要であるだろう。

表 8 各コミュニケーション対象における各頻度群の仮想的有能感平均得点 (カッコ内は SD)

表 8-1 7 対象合計					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=33)	24.39 (6.55)	26.88 (6.99)	26.88 (8.13)	27.00 (6.93)	n.s
一貫低群 (n=35)	26.60 (8.84)	27.57 (9.35)	27.51 (8.99)	27.40 (8.32)	
減少群 (n=27)	27.22 (6.26)	28.15 (7.63)	29.07 (7.81)	29.41 (6.75)	
増加群 (n=25)	27.68 (5.61)	29.36 (6.99)	28.72 (6.61)	28.40 (7.21)	
表 8-2 家族					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=50)	25.10 (6.48)	27.02 (8.04)	26.62 (7.45)	27.06 (6.75)	n.s
一貫低群 (n=27)	28.15 (8.41)	28.59 (9.38)	29.74 (9.49)	27.67 (9.54)	
減少群 (n=30)	24.97 (6.57)	26.60 (7.27)	25.27 (7.22)	26.40 (7.26)	
表 8-3 先生					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=19)	26.95 (5.11)	29.21 (6.89)	28.58 (8.52)	29.16 (7.31)	n.s
一貫低群 (n=32)	26.66 (8.62)	27.09 (8.41)	26.84 (8.04)	27.38 (7.73)	
減少群 (n=35)	26.11 (7.43)	28.97 (9.14)	28.66 (8.09)	28.26 (8.64)	
増加群 (n=16)	26.38 (5.61)	27.75 (5.91)	27.75 (7.93)	28.44 (5.27)	
表 8-4 同級生					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=69)	24.77 (6.16)	26.74 (7.96)	26.17 (7.62)	26.65 (7.09)	** 減少群 > 一貫高群 > 増加群
減少群 (n=27)	29.59 (5.56)	30.48 (7.46)	30.67 (7.80)	29.96 (8.54)	
増加群 (n=20)	23.65 (6.23)	24.95 (6.33)	24.30 (7.06)	25.95 (6.44)	
表 8-5 友人					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=66)	24.47 (6.40)	26.33 (7.32)	26.58 (7.67)	26.56 (6.97)	† 減少群 > 一貫高群 = 増加群
減少群 (n=28)	28.82 (6.85)	30.68 (7.76)	31.11 (7.12)	30.18 (8.17)	
増加群 (n=14)	22.57 (6.57)	28.43 (9.05)	24.21 (6.46)	26.57 (7.03)	
表 8-6 先輩					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=44)	26.23 (7.13)	27.95 (8.59)	28.05 (9.09)	27.50 (8.17)	† 減少群 > 一貫高群 = 増加群 > 一貫低群
一貫低群 (n=34)	24.88 (6.35)	24.24 (6.70)	25.38 (6.20)	25.50 (6.28)	
減少群 (n=13)	27.92 (6.06)	30.77 (6.89)	30.54 (6.30)	30.62 (5.64)	
増加群 (n=28)	27.39 (7.65)	29.00 (7.16)	27.64 (7.72)	27.64 (8.10)	
表 8-7 地域					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=21)	25.38 (5.55)	27.26 (6.72)	27.38 (7.30)	28.24 (6.46)	n.s
一貫低群 (n=49)	26.98 (7.19)	28.04 (8.06)	26.55 (7.44)	27.18 (7.75)	
減少群 (n=35)	26.83 (7.77)	25.49 (8.59)	25.71 (8.80)	26.11 (7.73)	
表 8-8 年上					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=32)	26.03 (6.89)	27.72 (6.71)	28.16 (7.52)	27.19 (6.97)	n.s
一貫低群 (n=22)	26.59 (6.77)	27.73 (7.58)	28.55 (7.13)	27.82 (6.39)	
減少群 (n=44)	25.77 (6.89)	26.80 (7.77)	26.48 (7.63)	27.02 (7.75)	
未体験群 (n=12)	25.92 (6.69)	28.50 (10.44)	27.33 (8.74)	29.00 (9.13)	

表9 各コミュニケーション対象における各頻度群の自己肯定感平均得点(カッコ内はSD)

表9-1 7対象合計					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=33)	22.70 (3.87)	22.73 (3.45)	22.85 (3.13)	23.52 (3.48)	7月* : 一貫高群 = 減少群 > 一貫低群
一貫低群 (n=35)	20.43 (4.43)	19.71 (4.61)	19.94 (3.71)	20.00 (4.79)	10月†、1月* : 一貫高群 > 一貫低群
減少群 (n=27)	22.63 (4.22)	22.67 (4.29)	21.33 (4.75)	21.59 (4.82)	減少群 : 7月 > 10月
増加群 (n=25)	20.80 (3.98)	20.68 (4.01)	20.65 (4.65)	20.80 (3.73)	*一貫高群 > 減少群 > 上昇群 > 一貫低群

表9-2 家族					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=33)	21.40 (4.47)	21.24 (4.36)	20.88 (4.49)	21.36 (4.25)	
一貫低群 (n=35)	21.67 (4.17)	21.52 (3.85)	20.74 (4.27)	21.63 (4.60)	n.s
減少群 (n=27)	21.77 (4.10)	21.33 (4.78)	21.67 (3.74)	21.33 (4.54)	

表9-3 先生					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=19)	21.63 (5.57)	21.74 (4.92)	21.21 (5.22)	22.53 (4.25)	
一貫低群 (n=32)	20.47 (4.25)	19.78 (4.11)	19.81 (3.40)	20.38 (4.41)	
減少群 (n=35)	22.97 (4.04)	23.14 (4.03)	22.60 (4.47)	22.69 (4.79)	n.s
増加群 (n=16)	21.00 (3.32)	20.58 (3.94)	21.38 (4.09)	20.81 (3.38)	

表9-4 同級生					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=69)	21.94 (4.24)	22.01 (3.98)	21.84 (4.32)	22.36 (3.96)	
減少群 (n=27)	22.56 (3.76)	21.85 (4.49)	20.85 (4.12)	20.89 (4.64)	**減少群 : 4月 > 10月 = 1月
増加群 (n=20)	21.20 (3.66)	21.00 (3.83)	22.50 (3.09)	21.60 (3.84)	**増加群 : 7月 < 10月

表9-5 友人					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=66)	21.96 (4.13)	22.21 (3.94)	22.12 (4.30)	22.35 (4.21)	
減少群 (n=28)	22.11 (4.69)	21.64 (4.95)	20.75 (4.16)	20.93 (4.52)	*減少群 : 4月 > 10月 = 1月
増加群 (n=14)	20.64 (3.60)	20.29 (2.94)	20.79 (3.82)	21.07 (3.13)	

表9-6 先輩					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=44)	22.18 (3.86)	22.18 (3.67)	21.84 (3.95)	22.66 (3.86)	
一貫低群 (n=34)	20.76 (4.78)	20.59 (5.00)	20.65 (4.52)	21.09 (4.72)	
減少群 (n=13)	21.38 (4.36)	21.31 (4.41)	20.92 (3.79)	20.62 (4.76)	n.s
増加群 (n=28)	21.43 (4.25)	21.04 (3.74)	20.93 (3.92)	21.11 (4.19)	

表9-7 地域					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=21)	22.81 (3.58)	22.67 (3.96)	23.24 (3.50)	23.33 (3.39)	
一貫低群 (n=49)	20.45 (4.00)	20.47 (4.32)	20.63 (3.62)	20.45 (4.24)	*一貫高群 = 減少群 > 一貫低群
減少群 (n=35)	22.57 (4.89)	22.43 (4.42)	22.26 (4.67)	23.03 (4.57)	

表9-8 年上					
	4月	7月	10月	1月	有意性
一貫高群 (n=32)	23.00 (3.86)	22.91 (3.49)	22.44 (3.15)	22.72 (3.80)	
一貫低群 (n=22)	21.73 (3.96)	21.50 (4.19)	21.32 (3.78)	21.68 (4.08)	
減少群 (n=44)	21.86 (3.51)	21.84 (3.84)	21.86 (3.75)	22.09 (4.12)	*一貫高群 > 減少群 = 増加群 > 未体験群
未体験群 (n=12)	18.00 (4.90)	18.75 (5.52)	18.58 (4.59)	18.58 (4.57)	

5. 課外活動への参加状況と自己意識との関連

1年間にわたる課外活動への参加意思・参加状況と自己意識との関連を検討するため、課外活動への参加状況について試みに以下の得点化を行った。

第1回調査時の参加意思：あり＝1、なし＝0

第2回調査時の活動時間：あり＝2、なし＝0

第3回・第4回調査時の活動状況：前回調査時より活動時間が増加＝2、変化なし＝1、活動なし＝0

これらの得点化操作は恣意的な側面は否めないが、分析対象者ごとにこれらの合計点を算出することによって課外活動への積極性を変数化することを企図した。そこで課外活動（サークル活動・アルバイト・ボランティア活動）それぞれについて得点化を行い、さらにそれらの合計点を課外活動得点とし、第1回調査～第4回調査における仮想的有能感（他者軽視）および自己肯定感との相関係数を求めた。結果を表10に示す。分析の結果、仮想的有能感（他者軽視）との間にはほぼ相関関係は得られなかった一方、自己肯定感との間に弱い正の相関関係が得られた。

そこで、3つの課外活動ごとに課外活動得点を算出し自己意識との相関関係を求めた。結果を表11に示す。分析の結果、仮想的有能感（他者軽視）においては同様にほぼ相関関係は得られなかった。一方、自己肯定感においてアルバイト活動得点との間に非常に弱いものの正の相関関係が得られた。

上記の結果から、アルバイト活動に限定し、第3回調査時と第4回調査時において前回調査時（すなわち、第2回調査時あるいは第3回調査時）と比較してアルバイト活動時間に増減がみられたか否かで低下・変化なし・増加・活動時間なしの4群に分析対象者を群化し、第3回調査時・第4回調査時それぞれで自己肯定感を従属変数とする1要因被験者間分散分析を行った。各群の自己肯定感尺度得点の平均およびSDを表12に示す。分析の結果、第3回調査時 ($F_{[3,146]}=4.21, p<0.01$) および第4回調査時 ($F_{[3,146]}=3.14, p<0.05$) いずれも要因の効果が有意であった。そこでHolm法による多重比較を行った（表13参照）ところ、第4回調査時においては活動状況4群間に差はみられなかったが、第3回調査時においては活動なし群および増加群よりも変化なし群の自己肯定感尺度得点が高いことが示された。

分析の結果、第一に課外活動の有無は仮想的有能感（他者軽視）にはほぼ影響を与えない可能性が示唆された。速水（2011）が定義するように、仮想的有能感（他者軽視）傾向は自分自身が現実場面でどのような体験・経験をするかということとはある種独立に他者に対して抱く傾向であると考えられる。そうであるならば、現実場面での他者との関わりである課外活動をどの程度積極的に行っているかどうかは、仮想的有能感（他者軽視）傾向とはあまり関連性を持たないという可能性は考えられるだろう。

第二に、課外活動状況の変化は、わずかに自己肯定感に影響を与える可能性が示唆された。ただしここで留意すべきは、影響を与える可能性が示唆されたのがアルバイト活動状況のみであること、影響がみられたのが第3回調査時のみであること、そし

てアルバイト活動をそもそも行っていなかったり、アルバイト活動を行っていても第2回調査時と活動時間に変化がなかったりしていた分析対象者の方が、活動時間が増加していた分析対象者よりも自己肯定感はずかではあるが高かったという点である。吉田・伊東（2015）で述べたように、自己肯定感は基本的に一定のレベルを維持する傾向があるとすれば、第3回調査つまり後期授業期間開始当初というタイミングに、自己肯定感になんらかの影響を与える要因が潜んでいる可能性がある。また、アルバイト活動時間の増加した分析対象者の方が自己肯定感はずか低いという結果は、大学適応の観点から考えるとアルバイト活動を増加させることは適切な選択ではない可能性が考えられる。ただ、これらの傾向はずか差であり、アルバイト活動は自己肯定感に直接的な影響を与えているというよりはむしろ、なんらかの別の要因を媒介して間接的に影響を与えている可能性が考えられる。この点については、後述する別の分析を通してさらに検討する。

表 10 課外活動得点と自己意識尺度得点との相関関係

	第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査
仮想的有能感	-0.10	-0.13	-0.03	-0.05
自己肯定感	0.23**	0.23**	0.24**	0.29**

** : $p < 0.01$

表 11 各課外活動得点と自己意識尺度得点との相関関係

		4月	7月	10月	1月
仮想的有能感	サークル活動	-0.12	-0.15	-0.05	-0.08
	アルバイト活動	-0.04	-0.03	0.02	0.05
	ボランティア活動	-0.02	-0.06	-0.03	-0.07
自己肯定感	サークル活動	0.11	0.12	0.10	0.15
	アルバイト活動	0.20**	0.17**	0.20**	0.20**
	ボランティア活動	0.08	0.11	0.10	0.20

** : $p < 0.01$

表 12 アルバイト活動状況4群の自己肯定感尺度得点の平均（SD）

	前回調査からの活動時間の変化			
	低下	変化なし	増加	活動なし
第3回調査時	$n=33$ 22.24 (4.27)	$n=14$ 24.14 (3.74)	$n=58$ 21.02 (3.71)	$n=45$ 20.24 (4.07)
第4回調査時	$n=38$ 21.18 (3.53)	$n=17$ 23.18 (3.75)	$n=69$ 22.22 (4.40)	$n=26$ 19.77 (4.51)

表 13 自己肯定感尺度得点の多重比較の結果

		前回調査からの活動時間の変化			
第3回調査					
		低下	変化なし	増加	活動なし
第4回調査		差は有意ではなかった			

6. 入学意思と自己意識との関連

4月当初の入学意思の強さと第1回調査～第4回調査それぞれにおける仮想的有能感（他者軽視）および自己肯定感との相互相関を検討した。仮想的有能感（他者軽視）との関係を表14に、自己肯定感との関係を表15に示す。分析の結果、仮想的有能感尺度得点との間にのみすべての調査回において弱い負の相関関係が得られた。自己肯定感得点との間の相関関係は、いずれも有意ではなかった。

この結果から、4月当初の入学意思が相対的に低かった学生は、年間を通して仮想的有能感（他者軽視）傾向を高い状態で維持し続けていた可能性が示唆された。吉田・伊東（2015）でも述べたように、先行研究では仮想的有能感とネガティブな自己評価との関連が指摘されている。入学意思が低い学生の中には、いわゆる不本意入学や学習動機・修学動機の低い学生が含まれると考えられ、それらの要因によって起こりうる自己評価の低下とバランスをとるかのように仮想的有能感を維持している可能性が考えられる。ただ、その関係性は全般的に低い値にとどまっておき、4月当初の入学意思の低さのみが仮想的有能感に影響を与えているのではないことも併せて考慮する必要があるだろう。

表 14 4月当初の入学意思と仮想的有能感との相関関係

第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査
-0.282**	-0.184*	-0.187*	-0.205*

*: $p < 0.05$; **: $p < 0.01$

表 15 4月当初の入学意思と自己肯定感との相関関係

第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査
0.099	0.058	0.075	0.007

7. 入学意思・課外活動頻度およびコミュニケーション頻度と自己意識との関連

前節までで個別的に検討を行った、4月当初の入学意思、課外活動の頻度およびコミュニケーション頻度と、仮想的有能感（他者軽視）・自己肯定感との関連を総合的に検討することを試みた。

分析の前に、構造の単純化を図るため課外活動の頻度およびコミュニケーション頻

度について変数の集約化を試みた。まず、第1回調査におけるサークル活動の意思・アルバイト活動の意思・ボランティア活動の意思、第2回調査～第4回調査におけるサークル活動時間・アルバイト活動時間・ボランティア活動時間相互の相関関係を調査回ごとに算出した結果を表16に示す。分析の結果、各調査回内の3つの活動状況は一部を除いてほぼ独立していると考えられるため、課外活動状況は集約せず、それぞれ独立の変数として分析に用いることとした。

次に、コミュニケーション頻度7項目の集約化を図るため、第1回調査のデータを用いて最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。結果を表17に示す。分析の結果、第一因子は先生や先輩、地域の人や年上の人との関連が高いため、「他者とのコミュニケーション」因子と命名した。第二因子は同級生や友人との関連が高く、「友人・同級生とのコミュニケーション」因子と命名した。家族へのコミュニケーション頻度はいずれの因子とも因子負荷量が高くなかった。そのため、第2回調査～第4回調査のデータについても念のため探索因子分析を行ったが、家族へのコミュニケーション頻度は安定した傾向が得られなかったため、因子からは除外し独立した変数として扱うこととした。この因子構造の妥当性を検討するため、同一の因子構造を用いて第1回調査～第4回調査各回のデータに対して確認的因子分析を行った。その結果第1回調査ではGFI=0.98, AGFI=0.95, RMSEA=0.01、第2回調査ではGFI=0.98, AGFI=0.96, RMSEA=0.00、第3回調査ではGFI=0.96, AGFI=0.89, RMSEA=0.11、第4回調査ではGFI=0.96, AGFI=0.90, RMSEA=0.10であった。また α 係数を算出したところ、第1回調査では他者とのコミュニケーション因子（以下、他者）が0.66、友人・同級生とのコミュニケーション因子（以下、友人）が0.70、第2回調査では他者が0.64、友人が0.57、第3回調査では他者が0.61、友人が0.65、第4回調査では他者が0.59、友人が0.82であった。以上の結果から、 α 係数の値が全般的に低く内的一貫性について議論が残るものの、適合度指標の結果から上記2因子構造を妥当であると判断し、各因子の項目回答の合計得点を各因子の尺度得点として集約化を図ることとした。

表16 調査回ごとの3つの課外活動状況相互の相関関係
(第1回調査のみ Spearman の順位相関係数、それ以外は積率相関係数を表す)

		アルバイト				ボランティア			
		第1回	第2回	第3回	第4回	第1回	第2回	第3回	第4回
サークル	第1回	0.07				0.10			
	第2回		-0.02				0.23*		
	第3回			-0.04				-0.10	
	第4回				-0.20*				0.10
アルバイト	第1回					0.13			
	第2回						-0.08		
	第3回							-0.03	
	第4回								0.00

*: $p < 0.05$

表 17 コミュニケーション頻度項目に対する探索的因子分析の結果
(第1回調査のデータに対する最尤法・プロマックス回転)

項目内容	I	II
自分の居住する地域の人	0.70	0.02
学校・塾の先生	0.69	-0.01
先輩	0.52	0.15
バイトやボランティア先の年上の人	0.44	0.07
家族（親兄弟だれか一人でも可）	0.27	0.11
現在の同級生	0.01	0.99
友人	0.12	0.55
因子間相関	I	II
I	—	0.17
II		—

上記の結果に基づいて、第1回調査～第4回調査のそれぞれについて、4月当初の入学意思、サークル活動・アルバイト活動・ボランティア活動の状況（第1回調査においては各課外活動への参加意思の有無のため、各変数をダミー変数として計算を行った）、他者とのコミュニケーション頻度、友人・同級生とのコミュニケーション頻度、家族とのコミュニケーション頻度を説明変数、仮想的有能感（他者軽視）および自己肯定感を目的変数として、構造方程式モデリングを用いて多変量回帰分析を行った。第1回調査～第4回調査それぞれについて、有意であった関係性のみを図1 a～図1 dのパス図に示す。

分析の結果、4月当初の入学意思は一貫して仮想的有能感（他者軽視）と関連があった。この結果は4月当初の入学意思との相関係数分析の結果と一致しており、入学意思が低い学生は他者軽視傾向が高いことが示唆されたと考えられる。したがって、不本意入学等本学への初期の入学意思の低さは、大学や大学の同級生との適応に一定の課題を抱える可能性があると考えられるだろう。また、前期授業期間（4月・7月）においては、友人や大学での同級生以外の他者とのコミュニケーション頻度が自己肯定感と関連があった。入学して間もない時期においては、大学での同級生との関わりもまだ十分ではなく大学での友人関係も十分確立できていないことが考えられる。したがって自分自身を肯定的にとらえることができる機会は大学よりむしろ大学外の他者との関わりの中にある可能性が考えられる。これが後期授業期間（10月・1月）では友人・同級生とのコミュニケーション頻度と自己肯定感との関連がみられるのも、入学後一定時間が経過し大学内での友人関係・交友関係が深まってくることで自己肯定感を支えている、と考えることができるだろう。さらに、友人・同級生とのコミュニケーション頻度は後期授業期間において、仮想的有能感（他者軽視）とも関連がみられた。したがって、大学内での交友関係の深化が他者軽視傾向を抑制し、大学への適応を支える可能性が示唆されたと考える。

一方、サークル・アルバイト・ボランティア活動といった課外活動への参加状況と、家族とのコミュニケーション頻度は仮想的有能感（他者軽視）や自己肯定感と直接的

な関連はみられなかった。ただ前期授業期間においては、特に課外活動の参加意思や参加状況と、他者とのコミュニケーション頻度との間にわずかではあるが関連がみられた。ただし、その関係の多くが負の関係にあることは、サークルやアルバイトといった課外活動を充実させることによってこれまでとは異なる人間関係・交友関係を構築し、その時点で置かれている状況に適応しようとしている表れであるのかもしれない。そのため、後期授業期間になると、課外活動を充実させることが仮想的有能感（他者軽視）を弱めたり、自己肯定感を高めたりすることに必ずしも直接的に関係しなくなっていく理由である可能性が考えられる。特に第3回調査（10月）において、アルバイト時間と友人・同級生とのコミュニケーション頻度との間に負の関連がみられたことと、前述した分析において第2回調査（7月）時点よりもアルバイト時間が増加した学生の方が、アルバイト時間が変化しなかった学生よりも自己肯定感得点が低かったことには共通する原因が考えられるだろう。すなわち、アルバイトに精力的に取り組むことで、後期授業期間に自己肯定感に影響を与える大学の同級生や友人と関わる時間が相対的に減少し、その結果アルバイト時間が増加した学生は間接的にその影響を受けることによって自己肯定感が低下したという可能性が考えられる。

また家族とのコミュニケーション頻度は直接的には仮想的有能感や自己肯定感と関連はみられなかったものの、他の相手とのコミュニケーション頻度との間には一貫して何らかの関連がみられた。このことから、家族とコミュニケーションが取れるということが最低限必要なコミュニケーションスキルである可能性が考えられるだろう。

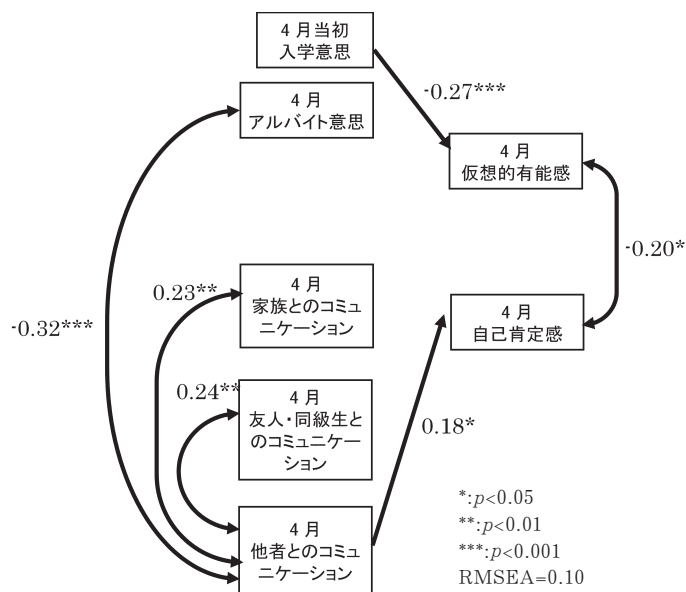


図1a 第1回調査（4月）におけるパス図

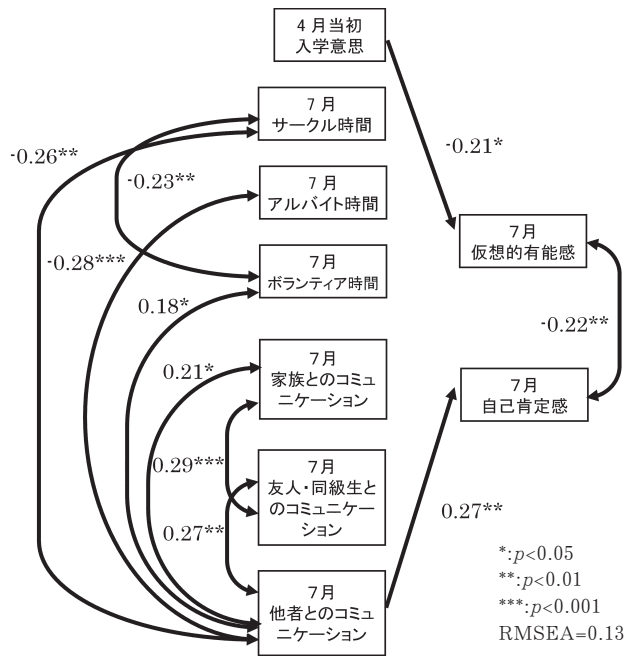


図 1 b 第 2 回調査 (7 月) におけるパス図

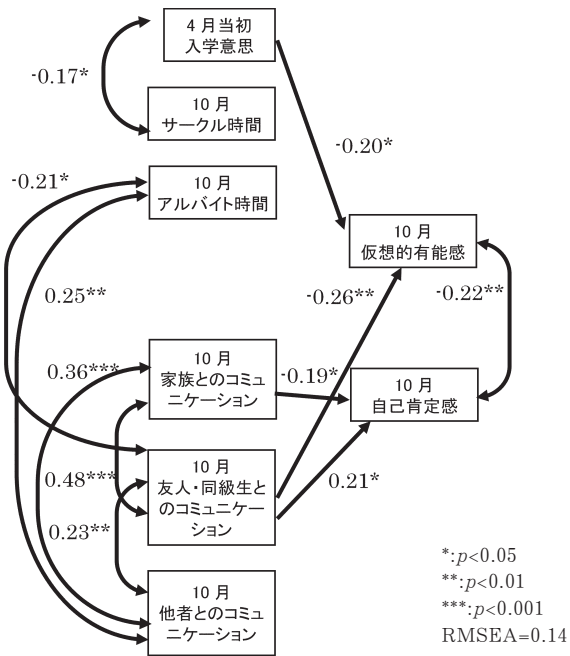


図 1 c 第 3 回調査 (10 月) におけるパス図

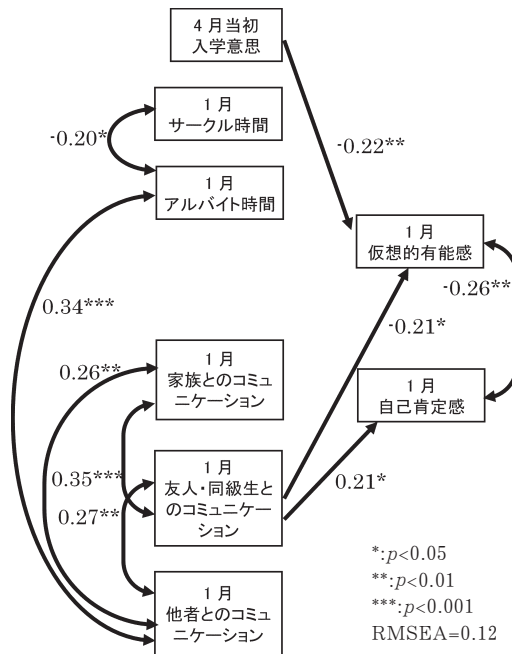


図 1d 第 4 回調査（1 月）におけるパス図

【まとめ】

本研究の目的は、4月当初の入学意思や課外活動の状況、他者とのコミュニケーション頻度を通して、適応に関係すると考えられる2つの自己意識に与える影響を継時的に検討することであった。全般的な結果として、年間を通して仮想的有能感（他者軽視）には4月当初の入学意思が、自己肯定感には様々な他者とのコミュニケーション頻度が影響を与えている可能性が示唆された。これらは先行研究と同様の傾向を示したと考えられるが、ここに時間軸を加えて継時的な側面から検討すると、多くの要因が自己意識に直接的にあるいは間接的に影響を与えている可能性が示唆された。

まず仮想的有能感（他者軽視）傾向については、4月当初の入学意思のほかに同級生や友人といった他者とのコミュニケーションの頻度が低い、すなわち関係性が希薄な場合に他者軽視傾向が強くなる可能性が示唆された。ただし継時的分析より、友人とのコミュニケーション頻度は徐々に減少する傾向にあることが示されていることから、友人等とのコミュニケーション頻度が低いことによって他者軽視傾向が高くなるという一方向的な関係性ではなく、他者軽視傾向が関係性の希薄さにつながり、そしてそれが再び友人等とのコミュニケーション頻度の低さに帰結するという循環的な関係が継時的に発生している可能性が考えられる。もしそうであるならば、コミュニケーションの量的側面よりもむしろ、質的側面に焦点を当てて検討すべきであるかもしれない。

次に自己肯定感については、地域の人・先輩・先生・年上の人といった他者とのコ

コミュニケーション頻度と、友人・同級生とのコミュニケーション頻度が低い場合、自己肯定感が低くなる可能性が示唆された。ただし継時的分析より、前期授業期間においては地域の人・先輩・先生・年上の人とのコミュニケーションが、後期においては友人・同級生とのコミュニケーションが自己肯定感に直接的に影響を与える可能性が示唆された。しかし前期・後期とも、それ以外の他者とのコミュニケーションは自己肯定感と全く関係していないのだろうか。確かに、各コミュニケーション対象者とのコミュニケーション頻度の経時比較では、一貫した傾向を示しているわけではない。しかしこれは半面、いかなる対象であってもコミュニケーションをとることができるということが、自己肯定感にポジティブな影響を与える可能性を示唆すると考える。そのため、調査時期全てにおいて各コミュニケーション対象者間の頻度には必ず何らかの関連性がみられ、かつ年間を通して一貫してコミュニケーション頻度が高い場合自己肯定感が高いという調査結果が得られているのかもしれない。したがって、自己肯定感に直接影響を与える要因が変化することがあるが、間接的に様々な人とコミュニケーションをとることができるというスキルが自己肯定感を下支えしている可能性がある。

一方課外活動状況は、仮想的有能感・自己肯定感双方に対して、直接的に影響力を持たない可能性が示唆された。しかし調査時期ごとの分析から、様々な他者とのコミュニケーション頻度との間に関係性が示唆されている。サークル活動やアルバイトなどは、他者とのコミュニケーションの機会を提供する、あるいは逆に奪ってしまう場を提供する存在であると考えられる。もしそうであるならば、様々な他者とのコミュニケーションを下支えする間接的役割を果たす場として、課外活動が自己意識に関係している可能性があるだろう。ただその際に、アルバイト活動が積極的に支持される場であるかどうかは検討の余地がある。特に第3回調査(10月)にあらわれているように、アルバイト時間の増加は学外の他者との接触頻度を高める反面、学内の他者すなわち同級生や友人との接触頻度を希薄化させる可能性がある。前述したように、同級生・友人とのコミュニケーション頻度の減少のみが自己意識に影響を与えるわけではないが、どのようにアルバイト活動に関わり、その結果どのような人間関係が構築できているのかが、間接的に自己意識に、ひいては適応に影響を与える可能性が考えられる。また、今回の調査ではサークル活動状況は自己意識に直接的にも間接的にもほとんど関連を持たなかったが、同級生や友人との関係性構築の場の1つとなり得るサークル活動が、自己意識と何ら関連がないとは俄かに考えにくい。その意味で、アルバイト活動と併せて課外活動の質的側面に着目する必要があるかもしれない。

また継時的分析から、夏休み前後の学生の自己意識の変化に注意を向ける必要性があることが示唆された。今回の調査におけるコミュニケーション頻度の分析やパス解析の結果から、不明な点が多いものの変数間の関係性あるいは変数の数値変動や状態に変化がみられる。初年次学生の適応の問題については、高下(2011)のように入学初期段階に着目した研究がみられるが、入学初期段階だけでなく、ある程度大学に慣れ、大学内での関係に変化がみられるようになる夏休み前後や後期期間にも注意を向

け、年間を通して継時的に対応する必要があるかもしれない。今後この点については、さらなる検討が必要であるだろう。

【文献】

- 速水敏彦（著）（2006）． 他人を見下す若者たち 講談社．
- 速水敏彦（2011）． 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 文部科学省（2014）． 学生の中途退学や休学等の状況について（報道発表） 文部科学省（2014年9月25日）
- 永作稔・新井邦二郎（2005）． 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516-528.
- 中村真・松田英子（2013）． 大学生の学校適応に影響する要因の検討：大学不適応，大学満足，就学意欲に着目して 江戸川大学紀要, 23, 151-160.
- 大久保智生（2004）． 新入生における大学環境への主観的適応に関する PAC（個人別態度構造）分析 パーソナリティ研究, 13, 44-57.
- 高下梓（2011）． 大学新入生の適応感の変化：4月から7月にかけての初期適応過程 明星大学心理学年報, 29, 9-19.
- 田中道弘（2005）． 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 人間科学論究, 13, 15-27.
- 脇本竜太郎（2013）． 大学適応感を予測する新入生研修の継時的評価 心理学研究, 84, 429-435.
- 谷島弘仁（2005）． 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究, 27, 19-27.
- 山田ゆかり（2006）． 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.
- 吉田哲也・伊東明子（2015）． 常葉大学教育学部新入生における自己意識の変化 常葉大学教育学部紀要, 35, 199-224.